

- (14) 註(2)に同じ。
(15) 註(5)に同じ。

第4節 動物遺存体

(1) 貝類

八重山諸島の平均気温は23.7℃とあたたかく熱帯性海域に属し、珊瑚礁が発達し、有用貝類の多棲する好条件に恵まれている。

河川流域や洪積世の台地・沖積世の砂丘・石灰岩の台地、又は平地、更に洞窟・岩陰等には、有史以前から近世にかけて豊富な貝塚が形成、遺存している。

貝塚はゴミ捨て場的な単なる貝のみの堆積物ではなく、さまざまな要因が関与し合って形成された、云わば過去の人間の生活総体の一つの現われでもある。

その貝塚の規模や形状は地形・人口・居住の期間、それに貝の繁殖状況等によってさまざまな様相を呈している。

今回の調査では3カ所に50cm四方のスポットを設定し、貝類を主とした柱状サンプリングを行ない、上記の問題を少しく考えてみた。予算、時間等の制約から、メッシュなどの使用を行なえなかったのは残念であるが、お許し願いたい。

サンプリング地点の1(G-5グリッド)・2(K-5グリッド)は結果的に攪乱をうけており、貝の量も少なく、サンプルとしては使用出来ないことが判った。3(K-5グリッド、Fig. 5)は今回発掘した一つの貝層の中心部であり、層位的にもしっかりした部分であったので、ここでは3地点の資料を使って以下の分析を行なってみることにした。

サンプル地点の層位は3層に分けられ、第1層の表土層は暗褐色砂層で、その下に未攪乱の貝層があり、さらにベースの第Ⅲ層黄褐色砂層となっている。第1層は貝層の崩れで攪乱を受けており、量的にも少なかった(Tab. 7)。同様に黄褐色砂層上面からの貝の出土量は極めて少なく、量的には貝層部と比較することは出来ない。貝層は第Ⅱ章、第4節にも述べている様に、層位の細分は困難で単一貝層と見て誤りないものと思う。従って一定期間の単一貝層と考え、また第1層及び第Ⅲ層の貝類も量的に極めて少なく、基本的に貝層部の内容と変りないことから、貝層データに含めて考察してみた。

仲筋貝塚検出の貝類はTab. 7に示すように、総数1,762個で、陸産貝が1科1種、海産貝21科47種の計22科48種の貝が検出された。

なお、貝類の個体数の算出については、巻貝は殻頂が残存しているものを1個体とし、2枚貝においては右殻・左殻に分け、その多い方を個体数にした。ヒメジャコガイは大部分が小殻片のため、殻頂が残存し前背縁の大きく開く足糸孔により、右殻・左殻に分けその多い方を最小個

Tab. 7 棲息地区別(底質)貝類組成表

科名	和名	方言名	2枚貝・巻貝	第Ⅰ層 暗褐色砂層		第Ⅱ層 貝層		第Ⅲ層 黄褐色砂層		計		棲息地別(%)	潮間帯別(%)	全体(%)
				個数	重さ(g)	個数	重さ(g)	個数	重さ(g)	個数	重さ(g)			
A 潮間帯の貝 砂底														
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	パモウル	2枚貝			5	8			5	8	100	0.32	0.28
B 潮間帯の貝 砂礫底														
マルスダレガイ科	ヤエヤマスダレ	シンナー	2枚貝	2	10	571	4,675	1	8	574	4,693	51.85	36.7	32.58
#	アラスジケマンガイ	シンナー	#	2	14	242	2,818	2	14	246	2,846	22.22	15.73	13.96
タマキガイ科	ソメワケグリガイ	ミンガイ	#	2	37	152	2,495	1	16	155	2,548	14.00	9.91	8.80
ザルガイ科	リュウキユウザルガイ	マースフエア	#	1	21	65	969	1	6	67	996	6.05	4.28	3.80
#	カワラガイ	マースフエア	#			23	330			23	330	2.08	1.47	1.31
リュウキユウマスオガイ科	リュウキユウマスオガイ	ブシユブドオ	#	1	14	5	46			6	60	0.54	0.38	0.34
マルスダレガイ科	リュウキユウアサリ	クボラマ	#			2	35			2	35	0.18	0.13	0.11
#	オイノカガミガイ		#			7	46			7	46	0.63	0.45	0.40
バカガイ科	カモジガイ		#			2	120			2	120	0.18	0.13	0.11
マルスダレガイ科	ヌノメガイ		#			1	90			1	90	0.09	0.06	0.06
フネガイ科	リュウキユウサルボウガイ	マースフエア	#			1	30			1	30	0.09	0.06	0.06
ソデガイ科	オハグロガイ	テイダジャマ	巻貝			3	18			3	18	0.27	0.19	0.17
オリイレヨフバイ科	イボヨフバイ		#			2	5			2	5	0.18	0.13	0.11
タマガイ科	ロウイロトミガイ	ツユダナー	#			5	17			5	17	0.45	0.32	0.28
#	カザリダマガイ		#	1	1	12	5			13	6	1.17	0.83	0.74
小計				9	97	1,093	11,699	5	44	1,107	11,840	99.98	70.77	62.83
C 潮間帯の貝 岩礫底														
フネガイ科	クロミノエガイ	グシイケン	2枚貝			104	286			104	286	42.11	6.65	5.90
#	ベニエガイ		#			6	47			6	47	2.43	0.38	0.34
リュウテンサザエ科	カンギクガイ	ツブソナー	巻貝	1	1	75	175			76	176	30.77	4.86	4.31
ソデガイ科	マガキガイ	ユナーブグ	#	3	100	43	1,350	1	30	47	1,480	19.03	3.01	2.67
アマオブネガイ科	アマオブネガイ	フウスヌバイ	#	2	2	10	24			12	26	4.86	0.77	0.68
#	ニシキアマオブネ	ツクイアマンター	#			2	8			2	8	0.81	0.13	0.11
				6	103	240	1,890	1	30	247	2,023	100.01	15.80	14.01

D 潮間帯の貝 岩 礁														
イガイ科	クジャクガイ	グシイケン	2枚貝			15	25			15	25	7.32	0.96	0.85
ウグイスガイ科	ヘリトリアオリガイ		#			1	3			1	3	0.49	0.06	0.06
オニコブシガイ科	オニコブシガイ	ヌサンナ	巻貝	1	22	36	776			37	798	18.05	2.37	2.10
アキガイ科	ムラサキイガレイシガイ	#	#			5	103			5	103	2.44	0.32	0.28
#	アカイガレイシガイ	#	#			3	60			3	60	1.46	0.19	0.17
#	シロクチキナレイシガイ	#	#			1	23			1	23	0.49	0.06	0.06
ソデガイ科	ムカシタモトガイ	テイダジャーマ	#			117	741			117	741	57.07	7.48	6.64
アマオブネガイ科	インダタミアマオブネガイ		#			16	18			16	18	7.80	1.02	0.91
#	キバアマガイ	ミーツブアママンター	#			4	14			4	14	1.95	0.26	0.23
アキガイ科	ガンゼキボラ	ミイバギンナー	#			2	56			2	56	0.98	0.13	0.11
フジツガイ科	シオボラ		#			1	8			1	8	0.49	0.06	0.06
タカラガイ科	キイロダカラガイ	ウンボラマ	#			1	5			1	5	0.49	0.06	0.06
イモガイ科	マダライモガイ		#			1	10			1	10	0.49	0.06	0.06
#	クロフモドキ	ビツトウル	#			1	25			1	25	0.49	0.06	0.06
小 計				1	22	204	1,867			205	1,889	100.01	13.09	11.65
潮間帯の貝合計				16	222	1,542	15,464	6	74	1,564	15,760		99.98	88.77
E 潮間帯下の貝 砂礫底														
シヤコガイ科	シヤゴウガイ	フボイ	2枚貝			1	78			1	78	4.55	0.53	0.06
タカラガイ科	ホンダカラガイ	ンボウラ	巻貝			1	34			1	34	4.55	0.53	0.06
#	ホンヤクジマダカラ		#	1	12					1	12	4.55	0.53	0.06
ソデガイ科	スイショウガイ		#	1	27	17	399			18	426	81.82	9.57	1.02
イモガイ科	ダイミョウイモガイ	アサビツトウル	#			1	46			1	46	4.55	0.53	0.06
小 計				2	39	20	557			22	596	100.02	11.69	1.26
F 潮間帯下の貝 内礁(珊瑚礁)														
シヤコガイ科	ヒメシヤコガイ	ギシヤ	2枚貝	2	88	158	6,235	1	15	161	6,338	97.58	85.64	9.14
ソデガイ科	クモガイ	ヤドムウレ	巻貝			1	198			1	198	0.61	0.53	0.06
オニコブシガイ科	オニコブシガイ	チビイトウガヤンナ	#			1	50			1	50	0.61	0.53	0.06
ニシキウスガイ科	サラサバテイ	カタビサンナ	#			1	10			1	10	0.61	0.53	0.06
コロモガイ科	モモエボラ		#	1	20					1	20	0.61	0.53	0.06
小 計				3	108	161	6,493	1	15	165	6,616	100.02	87.76	9.38

貝

G 潮間帯下の貝 外礁(珊瑚礁)														
リュウテンサザエ科	ヤコウガイ	ヤフンガイ	巻貝					1	106	1	106	100	0.53	0.06
潮間帯下の貝合計				5	147	181	7,050	2	121	188	7,318		99.98	10.70
海産貝合計				21	369	1,723	22,514	8	195	1,752	23,078			99.47
H 陸産の貝														
オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	チイダミ	巻貝			10	5			10	5	100		0.57
総計				21	369	1,733	22,519	8	195	1,762	23,083			100.04

体数とした。

仲筋貝塚の前面には、静かな川平湾が望まれる。総て貝の採取は、ごく当然のこととして、川平湾を中心として、捕獲されていたと考えられよう。そこで、川平湾で現在棲息する貝類を基準にして、出土貝類の分析を行なった。

川平湾の湾口には隆起珊瑚礁上の越島（小島）・マジヤ島等の大小の島々が点在し狭い水道によって外海に通じている。

貝類群集の分布は、水質・底質・地形等の物理化学的環境要因を強く受けると云われ、又貝類遺骸群集の解析から、古環境を復原（元）するためには現在の生態環境についての知識が不可欠となる。

そこで、川平湾内のシードの浜一帯・湾口・越島（小島）・周辺等の現地踏査を踏まえて検出した貝類遺骸を棲息場所ごとに組成し、仲筋貝塚形成当時の棲息環境の復原（元）を試みたのがTab. 8、Fig. 16である。

これから推して考えると、主として食料源である貝類捕採は干潮時の干潟で行われたことが推定され、捕採場所を、Ⅰ．湾内、Ⅱ．東側の水道部（湾口）、Ⅲ．湾外裾礁（リーフ）内、Ⅳ．裾礁（リーフ）外に分けた。

また、貝類の棲息場所は底性と密接な関係があることから、さらに細分して底質ごとに、A．砂底、B．砂礫底、C．岩礫底、D．岩礁、E．潮間帯下の砂礫底、F．内礁（珊瑚礁）、G．外礁（珊瑚礁）等に群集区分を行った。

Ⅰ．湾内

シードの浜一帯は遠浅で、砂底と砂礫底、小転石の広く平坦な礁原（干潟）が発達している。砂底にはイソハマグリを主体とするA．貝類群集があり、砂礫底にはヤエヤマダレ・アラスジケマンガイを主体とするB．貝類群集や、岩礫底にはエガイ・カンギクガイ・マガキガイ等を主体とするC．貝類群集等が多棲する絶好な環境にあったと考えられる。

海岸に沿う磯の砂底にはイソハマグリ（0.28%）が棲息し、砂礫底にはヤエヤマダレ・アラスジケマンガイを主体とするB．貝類群集（62.83%）が棲息し、さらに岩礫底にはエガイ・カンギクガイ・マガキガイ等を主体とするC．貝類群集（14.01%）が棲息している。そのなかで、2枚貝が88.23%と密度が高く、湾内で捕採した貝類は全体の77.12%を占めて、圧倒的に多く、仲筋貝塚形成当時、その一帯で、積極的な貝類の獲得捕採が行われたことが推定できる。又、湾内の潮間帯下の貝には、スイショウガイを主体とするE．貝類群集やヒメジャコガイを主体とするF．貝類群集があるが主湾縁周辺の浅瀬および主湾内の急斜面には、造礁珊瑚が発達しており、主湾部は急深でかなりの水深があり流れが早いので、ここでは積極的な貝の捕採はなされなかったと思われる。

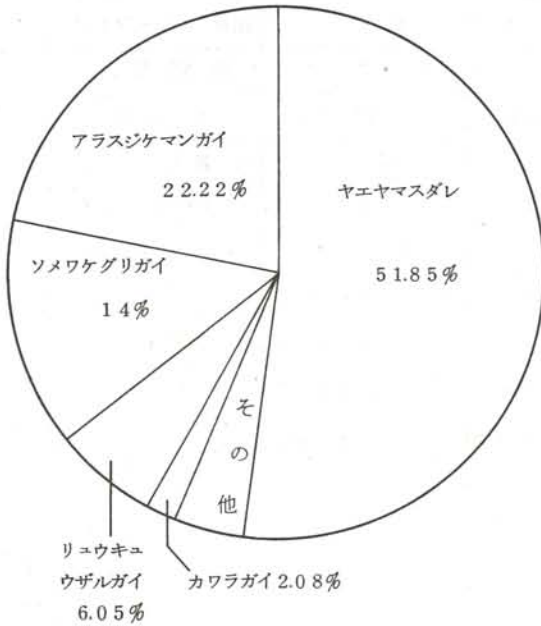
Tab. 8 川平湾 (内外) における生態環境と貝類遺骸群集区分

水 環		沿 岸			
環 境	棲息地	湾 の 奥	湾 内		東 側 の
		潮 間 帯	潮 間 帯		潮 間
	底 質	砂 底	砂 礫 底	岩 礫 底	岩 礁 岩 礫 底
貝 類 名	A. 群集	B. 群集	C. 群集	D. 群集	C. 群集
	イソハマグリ	ヤエヤマダレ	クロミノエガイ	クジャクガイ	クロミノエガイ
	0.28%	アラスジケマンガイ	ベニエガイ	ヘリトリアオリガイ	ベニエガイ
		ソメワケグリガイ	カンギクガイ	コオニコブシガイ	カンギクガイ
		リュウキュウザルガイ	マガキガイ	ムラサキイガレイシガイ	マガキガイ
		カワラガイ	アマオブネガイ	アカイガレイシガイ	アマオブネガイ
		リュウキュウマスオガイ	ニシキアマオブネ	シロクチキナレイシガイ	ニシキアマオブネ
		リュウキュウアサリ	1 4.0 1%	ムカシタモトガイ	1 4.0 1%
		オイノカガミガイ		イシダミアマオブネガイ	
		カモジカイ		キバアマガイ	
	ヌノメガイ		ガンゼキボラ		
	リュウキュウサルボウガイ		シオボラ		
	オハグロガイ		キイロダカラガイ		
	イボヨフバイ		マダライモガイ		
	ロウイロトミガイ		クロフモドキ		
	カザリダマガイ		1 1.6 5%		
	6 2.8 3%				
	潮 間 帯 下 (1 0.7%)				
	E. 群集	(内礁)	F. 群集		
	シャゴウガイ		ヒメジヤコガイ		
	ホシダカラガイ		クモガイ		
	ホンヤクジマダカラ		オニコブシガイ		
	ダイミョウイモガイ		サラサバテイ		
	スイショウガイ		モモエボラ		
	1.2 6%		9.3 8%		
場所名	シー ド パー マ 水 道 の 浜			シー ド 水 道	

水		魂		外洋水魂		
水道	湾外裾礁(リーフ)内			裾礁(リーフ)外		
帯	潮間帯		礁地	潮間帯下		
砂礫底	岩礁	岩礫底	砂礫底	外礁		
<u>B. 群集</u>	<u>D. 群集</u>	<u>C. 群集</u>	<u>E. 群集</u>	<u>G. 群集</u>		
ヤエヤマスダレ	クジャクガイ	クロミノエガイ	シャゴウガイ	ヤコウガイ		
アラスジケマンガイ	ヘリトリアオリガイ	ベニエガイ	ホシダカラガイ	0.06%		
ソメワケグリガイ	コオニコブシガイ	カンギクガイ	ホンヤクジマダカラ			
リュウキュウザルガイ	ムラサキイガレイシガイ	マガキガイ	ダイミョウイモガイ			
カワラガイ	アカイガレイシガイ	アマオブネガイ	スイショウガイ			
リュウキュウマスオガイ	シロクチキナレイシガイ	ニシキアマオブネ	1.26%			
リュウキュウアサリ	ムカシタモトガイ	1.401%				
オイノカガミガイ	イシダミアマオブネガイ					
カモジガイ	キバアマガイ					
ヌノメガイ	ガンゼキボラ					
リュウキュウサルボウガイ	シオボラ					
オハグロガイ	キイロダカラガイ					
イボヨフバイ	マダライモガイ					
ロウイロトミガイ	クロフモドキ					
カザリダマガイ	1.165%					
6.283%						
			内礁			
			<u>F. 群集</u>			
			ヒメジャコガイ			
			クモガイ			
			オニコブシガイ			
			サラサバテイ			
			モモエボラ			
			9.38%			
ウニ 湾	ナート 口	ク 越	スマ 島	イー 海	ナー 岸	アールピーヌヤトウ 東 裾礁 外

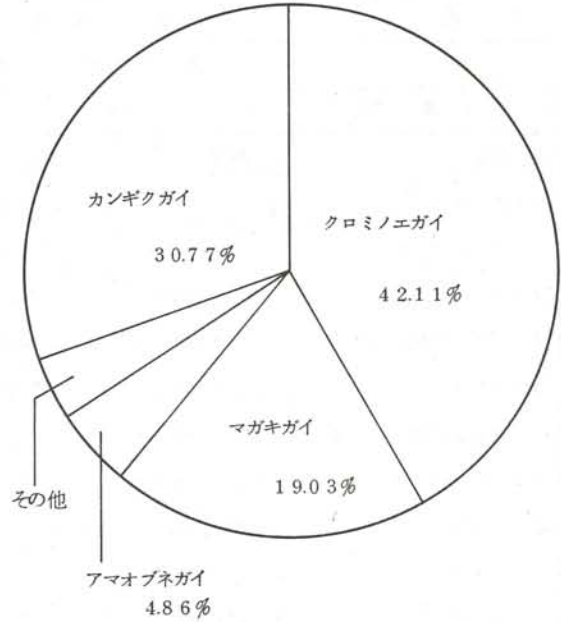
・ヤマヤマスダレ、アラスジケマンガイ
主体とする。

B. 貝類群集比 (砂礫底)



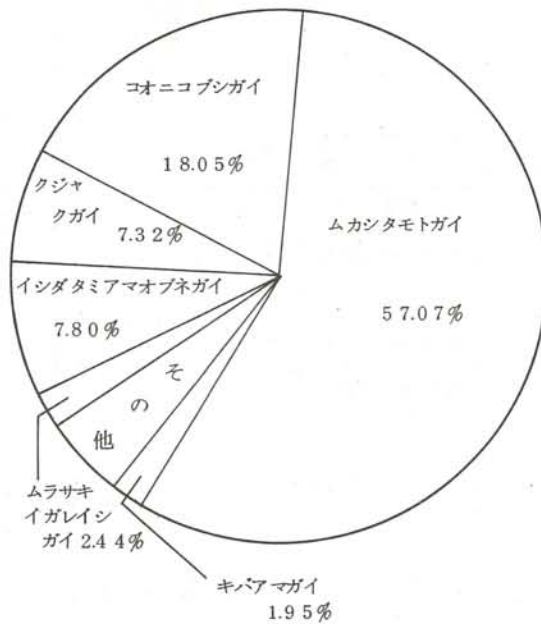
・エガイ、カンギクガイ、マガキガイ
主体とする。

C. 貝類群集比 (岩礫底)

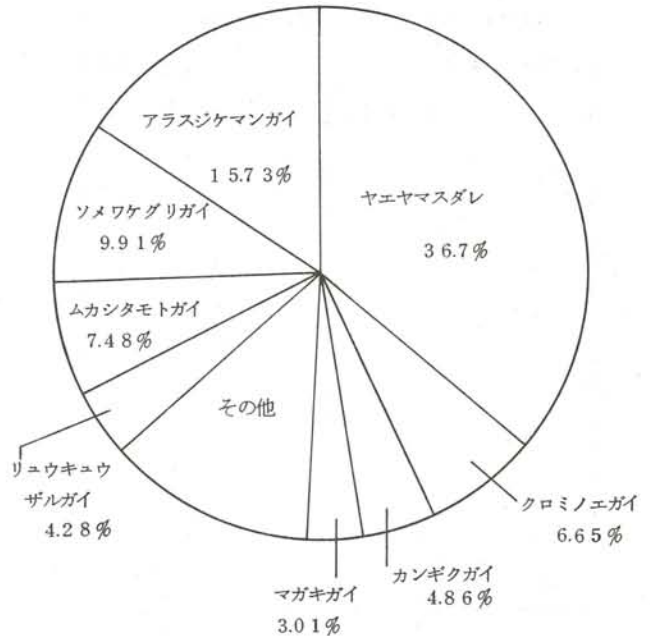


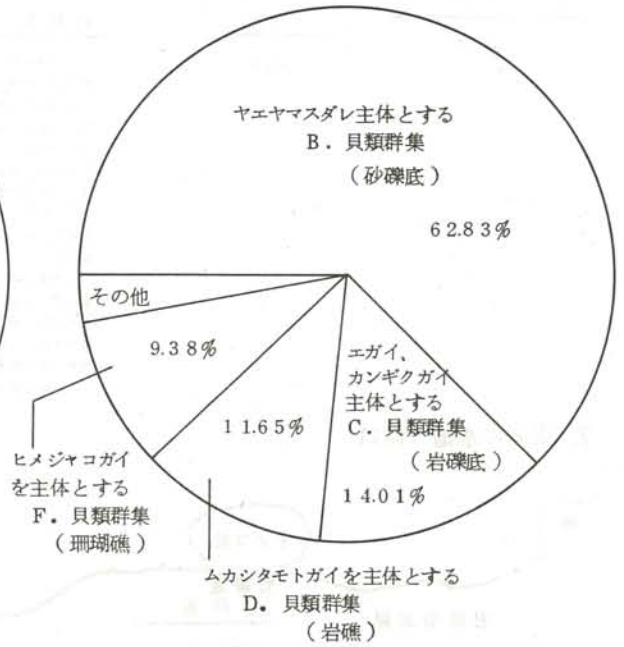
・ムカシタモトガイ主体とする

D. 貝類群集比 (岩礁)



・潮間帯の貝類組成比





Ⅱ. 東側の小水道 (湾口)

越島 (小島) 東側の小水道 (湾口) では、琉球石灰岩の崖に狭まれ、石灰岩の岩礁海岸を呈し、ところどころに大きなキノコ岩等がある。上げ潮のときは流れが早く、満潮時には、崖下まで水没するが、干潮時には干上がる。

干潮時の生態環境を観察すると、水路の砂礫底には、リュウキュウマスオガイ、岩礁には、イシダミアマオブネ・キバアマガイ・コオニコブシ等が少々見られるだけで群生せず、また、上げ潮時の流れが早いことから、ここでは、積極的な貝の捕採はなされなかったと思われる。

Ⅲ. 湾外裾礁 (リーフ) 内

越島 (小島) の東北海岸にかけてはノッチ状の琉球石灰岩の崖を呈し、垂直的にも水平的にもよく発達した広がり大きいビーチロックやところどころに大きなキノコ岩が見られる。

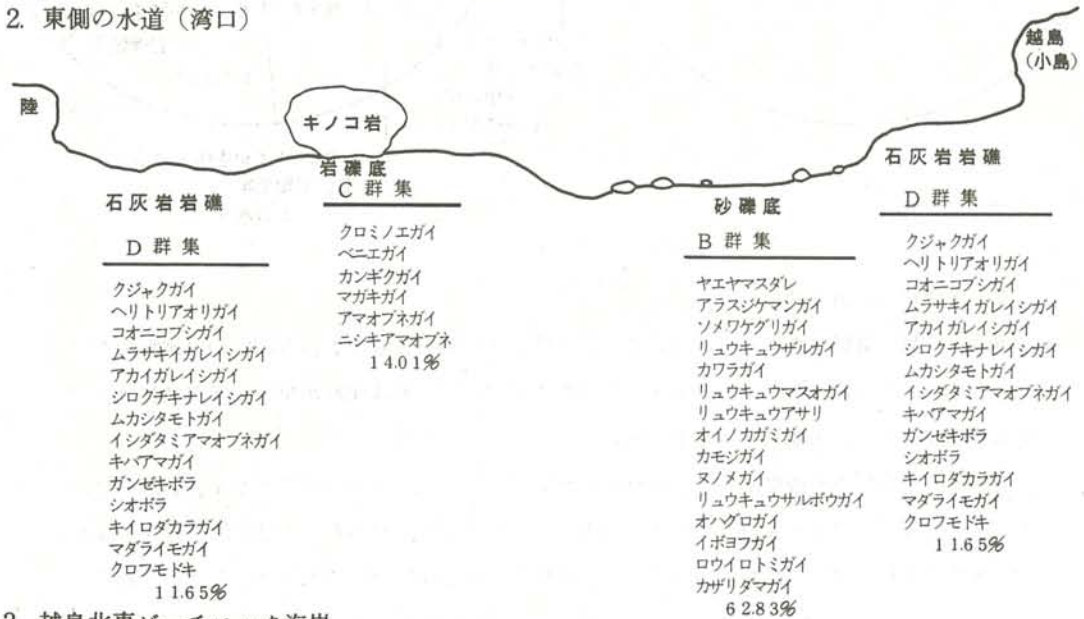
石灰岩の岩礁には、キバアマガイ・アマオブネ・コオニコブシ・マダライモガイ等が群生をなし、海岸に沿っての礁池 (ラグーン、方言名イノウ) の岩礁上にはヒメジャコガイ等が多棲しているのが見られる。

仲筋貝塚人は、干潮時に干上がる水道部を渡って越島 (小島) の北東にあるビーチロックの岩礁性海岸へ向かったと思われる。

1. 川平湾の奥部 (シードの浜)



2. 東側の水道 (湾口)



3. 越島北東ビーチロック海岸

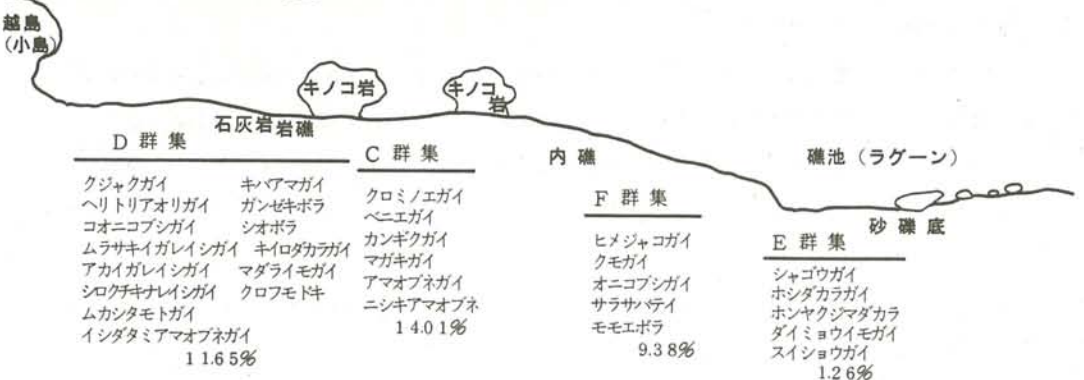


Fig. 16 干潮時における貝類群集の棲息分布

ここでは、エガイや小さな巻貝のカンギクガイ・マガキガイを主体とする C. 貝類群集 (14.01%) 及びムカシタモトガイを主体とする D. 貝類群集 (11.65%) 等の捕採が行われたと考えられる。

潮間帯下の貝と云われる貝が全体の 10.7% を示し、非常に少ないのだが、そのなかでは裾礁 (リーフ) 内の礁池 (ラグーン) に棲息するヒメジャコガイが 161 個 (85.64%) と圧倒的に多い。ヒメジャコガイは F. 貝類群集である。その他、スイショウガイは、18 個 (9.57%) あり、他に 1 個ずつある。これらはスイショウガイを主体とする E. 貝類群集 (1.26%) に属する。F. 貝類群集のヒメジャコガイ (9.14%) を獲得捕採の際、周辺の貝である E. 貝類群集をも捕採したことが推定できよう。

ヒメジャコガイにおいては右殻・左殻を含めて完形殻が 118 個、重さ 2,026g (32%)、殻頂部に穿孔されているのが 9 個のみで、大部分が小殻片で 4,312g (68%) である。2~3cm の幼貝のヒメジャコガイ等も多くある。ヒメジャコガイにおいては幼貝を含めた乱獲捕採の状況が想像される。

小殻片が 68% と多い理由は内礁 (珊瑚礁) に付着しているところのヒメジャコガイを捕るための技術上のものか、また、貝肉を捕るための抜き身上のものなのであろうか。従来の無土器文化と云われる貝塚から検出されるヒメジャコガイの状況とは異っており、今のところ本貝塚から発掘されたヒメジャコガイの状況と比較する資料が少なく、今後その点について詳細な研究を俟ちたい。

IV. 裾礁 (リーフ) 外

直接外洋に面した珊瑚礁で、海岸からかなりの距離にあるため天然の防波堤となっている。また、外礁 (珊瑚礁) の発達によって有形大形貝類・魚類の貝礁・魚礁となっている。

仲筋貝塚からは裾礁 (リーフ) の外と思われるのはヤコウガイ 1 個 (0.06%) のみ検出されている。仲筋貝塚人においては裾礁 (リーフ) 近辺との生活とあまり縁がうすいことが窺われる。

川平半島の底地湾に面したザンドウ原貝塚では、外洋性のある大形のヤコウガイ・オオジャコ・ヒレジャコ・ホラガイ・スイジガイ等の貝殻が畑のアゼに高く積まれたり、また一帯の耕作した畑等に露呈している。波照間島、下田原貝塚においても同様の事が窺われ、外洋性の美味であり、肉身の厚い高級食用貝のウエイトが大きかったことがわかり、外洋系の影響が強かったことを示している。仲筋貝塚では内湾性の小形貝類遺骸が多く、こうした傾向とは多分に異っている。これは単に嗜好的な選択による相異なるのか、あるいは蛋白源補給としての貝採取のウエイトが小さくなり、他の動物性蛋白質に移って行ったからなのか、また粟食・米食等の食生活に変わって行ったからなのか、現在のところ資料が少なく速断するのは難しい。

V. 陸産の貝

オキナワウスカワマイマイ（チィダミ）が10個（0.57%）検出されている。オキナワウスカワマイマイは、特に海岸のハマユウの下に多く棲息している。マイマイ類は沖縄・奄美圏の先史貝塚から出土し、蛋白源として食用に最も嗜食されていたことがわかる。1477年の朝鮮漂流民の西表島（祖納）、波照間島、黒島等の見聞記にも蝸を煮て食べた事が記されている。貝類等の捕採の際、海岸一帯のハマユウの下に棲息しているオキナワウスカワマイマイをも捕採したのであろう。

これまでに貝塚と貝類採取領域の関連等について述べてきた。

以上のことから、次の6つの点がわかった。

1. 海産貝（99.43%）のウエイトが高く、2枚貝の捕採場所としては、シードを浜一帯の砂礫底、小転石の礁原（干潟）を中心に捕採したと考えられる。但し、ヒメジャコガイと巻貝においては越島（小島）一帯で行われたことが推定できる。
2. 食料源としての貝類においては内湾性の小形の貝が99.37%と高く、非常に大きなウエイトを占めている。主として、調味料的なものとして利用されていたのではなかろうか。
3. 海産の2枚貝が78.14%と巻貝に比して、圧倒的に多く、そのなかでもヤエヤマスダレ（32.58%）・アラスジケマンガイ（13.96%）等が全体の46.54%を占めていること（Tab. 9）。
4. 海産貝においてヒメジャコガイ（9.14%）が多く、小さな幼貝をも捕採していたということは、当時の食用品として大いに嗜好されかなりとりつくされていたと思われること。
5. 陸産貝であるオキナワウスカワマイマイは、わずか0.57%弱であるが、やはり食料源として用いたことがわかった。
6. 川平湾沿岸に立地している仲筋貝塚の貝類遺骸組成と川平湾一帯に見られる貝類の組成とはよく一致すること。

以上のように、貝殻の分析によって、仲筋貝塚が営まれた当時の人々と貝の採取領域との関係や川平一帯の古環境の一端を推知することができる。

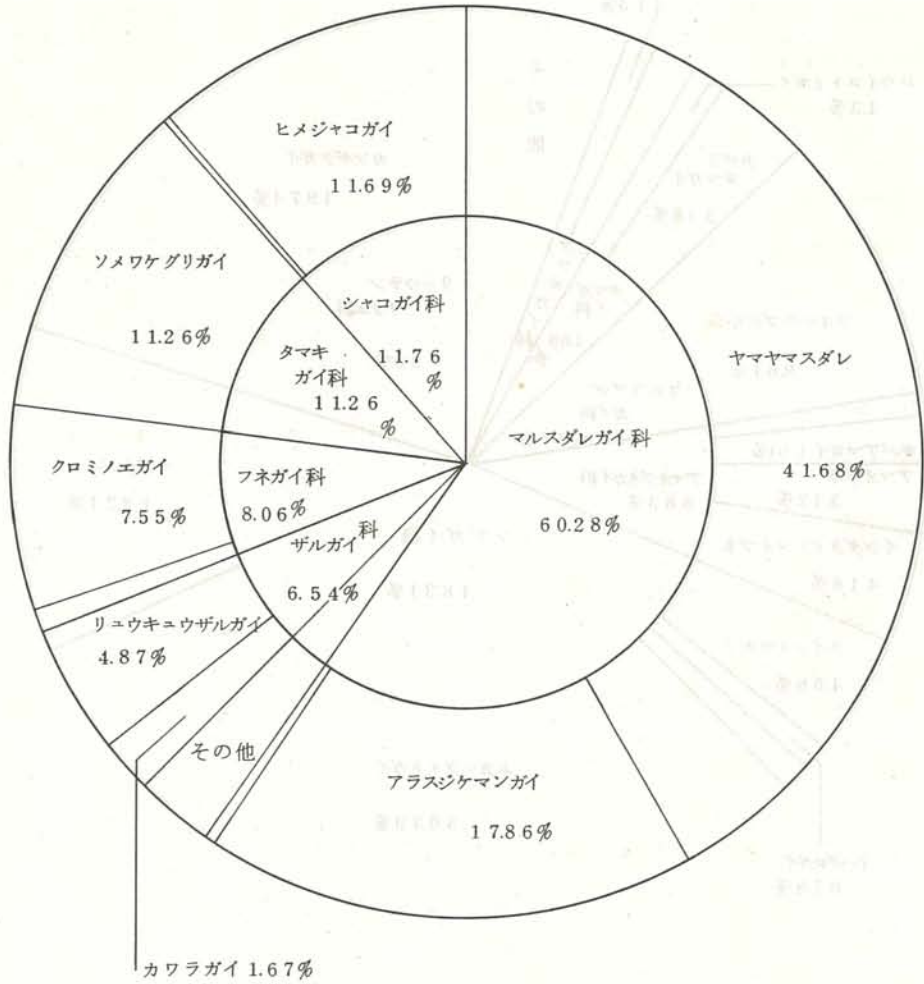
このような貴重な貝塚が、石垣島においても105カ所くらいあると云われている。しかし、実際はこれよりはるかに多いと思われる。

それは、貝塚の形成パターンが従来知られたことよりも、さらに多様化した形で見られることがわかってきたからである。

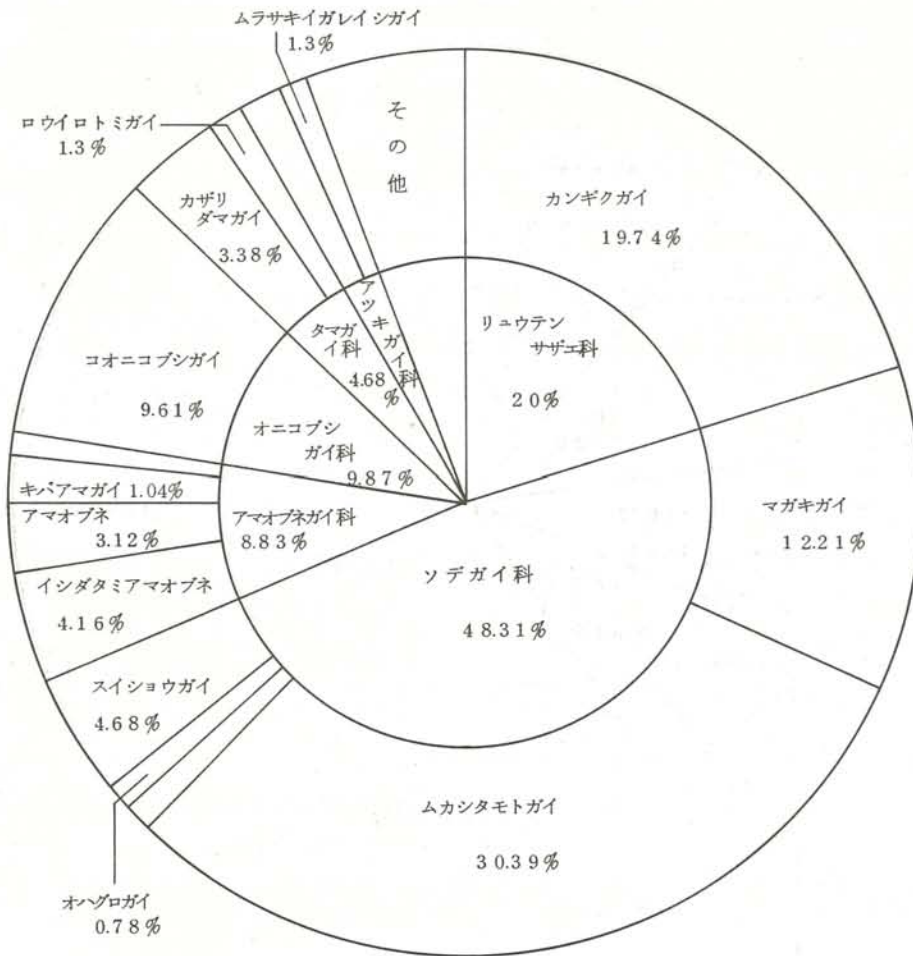
復帰（1972年）後は、石垣島において、本土並という開発一辺倒の美名のもとに遺跡破壊、消滅が年ごとに増大し、それらの対応すらなされず、闇から闇へと葬られた遺跡も数多くある。そのことは八重山の史前文化あるいは沖縄文化、強いては日本全体の文化に大きな空白を残すことは歴然としている。

Tab. 9 二枚貝・巻貝科別貝類組成比

二枚貝



巻 貝



有形の文化財のみならず無形の文化に対してもそれは同様であろう。何んらかの方策はないかと常日頃思うことである。

そうしたことを考えて、初めての試みであるが、貝の方言名についても調査してみた。

貝類は、最近まで主な蛋白源として食生活に欠くことのできないものであったが、食生活が向上するにつれ、その重要性もうすれ、生活から縁がうすくなってきた。そのため、方言名を地元の方たちから聞き取る際、難渋をきたした。

最後に、沖縄県水産試験場八重山支場の貝類標本を見せていただき、また方言名については川平老人クラブの方々にご協力を得た。さらに、貝殻整理の際、普天間高校生物担当久場安次氏に資料等やご教示をいただいた。

ここに感謝の意を表する。

(大浜 永亘)

付 記

共同調査者の一人である阿利直治氏は、貝殻の報告に関して異った見解をもっている。

参考文献

- 波部忠重・小菅貞男『貝』標準原色図鑑全集 3 保育社。
- 吉良哲明『原色日本貝類図鑑』1964年 増補改訂版 保育社。
- 波部忠重『続原色日本貝類図鑑』1962年 保育社。
- 波部忠重『貝Ⅰ巻貝』学研中高生図鑑 1976年 学研社。
- 波部忠重『貝Ⅱ2枚貝』学研中高生図鑑 1976年 学研社。
- 白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』1977 新星図書。
- 『おきなわの自然』1975年 沖縄県。
- 『八重山の潮間帯』1975年 沖縄県環境保健部自然保護課。
- 堀越増興「熱帯海域の沿岸生態系・地域生態系における自然地理的ユニットのモデルとしての石垣島川平湾」。
- 松島義章・大嶋和雄「縄文海進期における内湾の軟体動物群集」『第四紀研究』第13巻第3号 1974年10月。
- 酒詰仲男『貝塚に学ぶ』1970年 学生社。
- 金子浩昌「貝塚に見る縄文人の漁撈生活」『自然』12月号 1980年。
- 渡喜仁浜原貝塚調査団『渡喜仁浜原貝塚調査報告書』1977年 今帰仁村教育委員会。
- 滝口宏編『沖縄八重山』1960年 校倉書房。
- 金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学研究報告人文科学編』第9号 1955年。
- 牧野清『新八重山歴史』1972年。

大浜永亘 「八重山石垣島の新石器時代無土器遺跡」『南島考古』第4号 1975年。
大浜永亘 「付編、石垣島北部の遺跡について」『沖縄石垣島ヤマバレー遺跡調査概報』
1977年。

(2) 獣魚骨遺存体と骨器

1 獣魚骨遺存体

仲筋貝塚からは、ウシを主とする獣魚骨と骨器が出土している。採集方法は、発掘の時発見した資料を取り上げたものである。

ここに報告する資料は、小ダンボール一箱程度の量であり、谷川章雄氏から依頼を受けたものである。その際、発掘時の状態や層位などについて御教示いただき、その他種々お世話をおかけした。また東京水産大学の服部仁先生には魚類遺存体の同定の際に御指導いただき、また鹿児島大学の西中川駿助先生には比較標本として口ノ島在来牛の現生標本を見せていただいた。厚く感謝する次第である。

仲筋貝塚において出土した動物種の種類は以下のものである。

硬骨魚綱 Osteichthyes

1. クロダイ属 *Acanthopagrus* sp.
2. ベラ科 *Labridae* gen. et sp. indet.
3. カンダイ *L. semicossyphus reticulatus*.
4. ブダイ科 *Scaridae* gen. et sp. indet.
5. ナンヨウブダイ *S. gibbus*.
6. ハリセンボン科 *Diodontidae* gen. et sp. indet.

哺乳類 Mammalia

1. イノシシ *Sus leucomystax riukiuanus*
2. ウシ *Bos taurus*

魚類

1. クロダイ

① 前上顎骨

J-5 (西) 貝層 左 (l. 26.6)

K-5 (南半分の東) 貝層 右 (l. 38.8+, h. 38.4)

K-5 混貝砂層 (II層) 左 (l. 39.6, h. 37.2)

G-5 I層 左 (l. 29.3)

② 第1血管間棘

K-5 混貝砂層(Ⅱ層)

③ 背鰭

J-5 (西) 貝層

K-5 混貝砂層

出土する魚骨のうちクロダイは最も多い種類である。前上顎骨の形態からみて咬面の歯列が巾広いことや上部の突起にはいる溝が深いことなどからミナミクロダイであろう。

体長は顎骨長から推定して3.2~4.2cm位のものである。最小個体数は前上顎骨で大きさがそれぞれ異なるので別個体とし、4個を算えた。

2. ベラ科

① 前上顎骨

K-5 混貝砂層(Ⅱ層) 右

前上顎骨の前方に2本の大きな犬歯状歯の発達する種類である。

欠損部分の割れ口は古く、丁度、吻端をたたき切った様子を示している。

3. カンダイ

① 下咽頭歯

K-5 混貝砂層(Ⅱ層)

歯板に小さな歯が密にならび、中央部最後列には細長い歯が並ぶ。

欠損は新しい。

4. ブダイ科

① 上顎骨

J-5 セクション 貝層 右 (L. 32.2)

K-5 (東) 貝層 右 (L. 41.7)

② 下顎骨

K-5 混貝砂層(Ⅱ層) 左 (L. 25.5+)

歯の形態は、外側に歯が板状に組みあわさって2~4列みられるものと、1列のみのものの二種類あるようである。

5. ナンヨウブダイ

① 上咽頭歯

K-5 貝層(Ⅲ層)、左(歯板巾8.0)

② 下咽頭歯

K-5 (南半分の東) 貝層、(歯板長24.8、同巾10.4)

咽頭歯でみると、ブダイ科の中では、すべてナンヨウブダイに属するものであった。とくに上咽頭歯は、主歯列が一行で、痕跡歯は大小が交互に一行に並んでいるようにみえることから

容易に判別できるという（服部1979「ナガラ原西貝塚出土のブダイ科魚類の遺骸について」伊江島教委）。上咽頭歯は歯列のみ（歯列の後端は欠損）を残して前後部は折りとられている。下咽頭歯はほぼ完存しているが、上咽頭歯の個体よりも、かなり小さい個体である。

6. ハリセンボン科

① 上下顎骨

J-5 (東) 貝層

ハリセンボン科の顎骨は上下とも左右の顎骨体が癒合して、クチバシ状の顎骨となっている。おそらくイシガキフグであろうと思われるが、顎骨だけでは年令により歯板の状態が変化しやすいので、種の同定はむずかしいという。

上下の顎骨はおそらく同一個体のものであろう。あるいは、調理する前に、この固い大きなクチバシ状の部分を脱してすてたことを表わすのかもしれない。

仲筋貝塚で得られた魚種は、クロダイ、ベラ、ブダイ、ハリセンボンの4科であった。最少個体数はクロダイ4個体、ベラ1個体、ブダイ3個体、ハリセンボン科1個体である。出土地点は、G-5区の1層出土の1点をのぞいては、みなK-5の混貝砂層と貝層に限られている。これは、攪乱をうけない貝層の発達している場所がこの2区にほぼ限られているためであろう。約16m²の範囲で10~15cm程度の層中から得られた魚骨としては、それほど少ないとはいえないと思う。ただ、出土している部位が、顎骨と咽頭歯が殆ど大部分である。これらの部位のかたよりが、解体、調理や、廃棄の場所等に関して何らかの意味を有するかどうかについては、貝層中に椎骨などの小魚骨片がどの程度含まれていたかの再検討によらねばならない。

哺乳類

1. イノシシ

① 上顎骨

№1 J-5 貝層 R (P⁴ M¹ M² <M³>)
 脱
 歯冠長 (9.6 13.2 17.1)
 歯冠巾 (10.2 11.1 13.4)

② 下顎骨

№2 K-5 貝層 R (M₂ M₃)
 歯冠長 (16.0 25.9)
 歯冠巾 (10.7 12.5)

J-5 貝層 RI、

J-5 (東西セク) I層 LC ♂ (最大巾 19.5)

K-5 (南半の東) 貝層 RC ♂ (最大巾 15.0)

K-5 混貝砂層 LC♂ (最大巾 21.7)

③ 上腕骨

J-5 貝層 左(上・下端欠損)

④ 大腿骨

J-5 ベルト I 層 右(中間部)

⑤ 脛骨

J-5 表土 左(上・下端欠損)

⑥ 距骨

G-5 I 層 右(完存、全長 74.0)

⑦ 中手骨

K-5 I 層 Mc III (下端欠損)

全体にリュウキュウイノシシは小形であることがしられるが、仲筋貝塚出土のイノシシもかなり小さい。ただし、上腕骨は上・下端が欠損してわかりにくい、骨の中にくらべて長さが著しく短縮した形で現生リュウキュウイノシシの形態と異なる。攪乱によってブタの骨がはいったのではなかろうか。脛骨もその可能性がつよい。

上顎歯(№1)の咬耗はM¹が象牙質の咬耗の面が連絡しはじめ、M²の前半が象牙質の小孔があき、後端はエナメル質咬耗の段階にとどまっている個体である。下顎歯(№2)はM²が象牙質の咬耗が進行中で、M³はほぼ萌出をおわっているが前半がエナメル質咬耗の段階であるのに対し、後半は磨耗がほとんどみられない状態の個体である。いずれも、1~1.5才位の若い個体であろう。詳しい年令推定には現生標本のデータが未だないので確かではない。

『李朝成宗大王実録』によると、豚がいたとされるのは沖縄本島のみということである。同じく成宗実録には、西表島では、槍を使っての野猪の狩猟が盛んであったことが記されているという。また、狩猟でとらえた野猪の下顎骨をカマドの上にかけて一年分たまと竜宮の神に捧げるという風習が現在なおみられるという。

仲筋貝塚のイノシシの資料は僅かなのでこれだけでは何とも言えないが、西表島のような下顎骨の取りあつかいはしていないようである。また、M³が萌出途次から直後程度の若い個体が多いのではないかとと思われる。ある期間飼養することが行なわれていた可能性もある。波照間島の下田原貝塚などで、幼若獣が大部分を占めるという報告がなされているが、さらに石垣島をはじめ八重山諸島でのイノシシの家畜化の問題を、出土している遺存骨の再検討によって考えてみたいと思っている。

2. ウシ

① 頭蓋

J-5 (西) 貝層 右側外耳孔部分

右側前頭骨(眼窩部分)

- J-5 II層 左右耳骨
- ② 上顎骨
- I-5 I層 LM³ (齒冠長 20.4、同巾 29.9、同高 43.7)
- J-5 (西) I層 R<P⁴> 一部欠損
- J-5 (東) 貝層 RP³
- (同一個体) RP⁴ RM¹ RM² LM³
- | | | | | |
|---|------|------|-------|------|
| l | 19.0 | 26.8 | 20.7 | 31 |
| w | 15.6 | 21.0 | 31.0 | 14 |
| h | 28± | 30± | 36.5± | 46.1 |
- J-5 (東) 貝層上面 RM¹ RM² (同一)
- | | | |
|---|------|------|
| l | 26.5 | 29.8 |
| w | 20.2 | 21.5 |
| h | - | 34.4 |
- J-5 (西) 貝層 LP⁴ (l 22.2, w 15.5, h 13.4)
- ③ 下顎骨
- J-5 (東) I層 <P₃> (l 19, w 14.6)
- LM₂ (l 27.3, w 15.3, h 37.2)
- J-5 (西) 貝層 RI₁
- RP₄ (l 22.1, w 12.0, h 22.2)
- L<M₂> (l 31.2, h 50.4)
- K-5 II層 (攪乱) LP₄ LM₁ RI₁
- | | |
|----------|----------|
| (l 22.0) | (l 26.2) |
| h 22.5 | h 28.4 |
- K-5 (西) I層 RM₂ RM₃
- | | |
|----------|------|
| (l 28.2) | 36.0 |
| h 35.6 | 43.0 |
- K-5 (南) 貝層 LM₁ (l 29.5, h 34.8)
- LM₃ (l 40.0, h 56.2)
- ④ 肩甲骨
- J-5 I層 背縁部破片
- ⑤ 尺骨
- K-5 I層 左 (半月状切痕部分)
- ⑥ 寛骨
- K-5 貝層 腸骨破片

⑦ 脛骨

J-5 (西) I層 右 (下端外側片)

⑧ 中手・中足骨

J-5 (西) I層 下端 $\frac{1}{2}$ 右側片

上端 (Mt) 破片

J-5 貝層 下端 $\frac{1}{2}$ 左側片

足根骨

⑨ 指骨

J-5 表土 中節骨 足根骨

K-5 (東) 貝層 基節骨 (上端欠)

(下端片、黒く焼ける)

K-5 (南半分の東) 基節骨 (上端欠損)

⑩ 肋骨

K-5 (セク) 貝層 (上~中期)

K-5 (Ⅲ層) 貝層 (下半破片) (破片2)

K-5 (Ⅳ層) 黄色砂層 切断加工品

⑪ 脊椎骨

K-5 (Ⅱ層) 混貝砂層 (胸椎棘突起部片)

⑫ 骨片 (ウシのものと思われるもの)

計46片

ウシは仲筋貝塚の遺存骨の主体をなす種類であった。遺存骨の状態は、新しい欠損もあるが、殆ど打割られて上・下端を失っていたり、あるいは上端や、下端だけの破片であるので、その様子からみて、ウシを食用としていたことがわかる。『成宗実録』によれば八重山~本島にかけて広くウシを食用とすることが記されている。農作業の上でも肉資源のうえでも重要であったと思われる。出土した尺骨には解体のときについたと思われる刃傷や、その後のおそらく犬による咬痕と思われる傷が付着していた。肋骨のうち一片には、刃物によって、たたき切るときの段階状の深い切り込みがみられた。これらも、食用とした時の解体のあとを明らかに示す資料といえよう。

大きさは、遊離歯のみで明確には言えないが日本の在来牛とくらべて大きな差はないと思われる。口ノ島の在来牛の♂と♀の間にはいってしまう歯が多かった。

家畜としてのウシがいつごろから、またどこから系統をひいてもたらされたかについては、八重山諸島の農耕、稲作の系統をさぐるうえでも大切なことである。今後、データを集めて検討していきたい。

II 骨器

尖頭器が計5点出土している。いずれも骨製である。

① K-5 Ⅰ層 (Fig. 17-1, PL. 21(2)-2)

断面が円形に近くふくらむもの。保存が悪いため表面が粗面となっていてわかりにくい。刃器で削った平面が残っており当初は多角形をなしていたのであろう。削りながら表面を整形していくときの刃痕が横位に何本かずつ付いているのがみえる。

② J-5 Ⅱ層 (Fig. 17-2, PL. 21(2)-1)

断面が、やや扁平な円形となるもの。

裏面に、わずかに髄腔の海線体状の凹凸を整形したあとがみえている。

③ J-5 Ⅱ層 (Fig. 17-3, PL. 21(2)-3)

細長いタイプで、鍍身の両側が少し反り返るようになるもの。断面は扁平な四角形に近い。表面には刃器で削った面がそのまま残っている。裏面の鍍身基部から茎にかけて髄腔面がはっきりみえている。欠損は新しい。

④ K-5 Ⅱ層 (攪乱) (Fig. 17-4, PL. 21(2)-4)

細長いタイプ。先端の欠損は新しい。

⑤ J-5 Ⅱ層 (Fig. 17-5, PL. 21(2)-5)

細長く、断面が円形に近いもの。

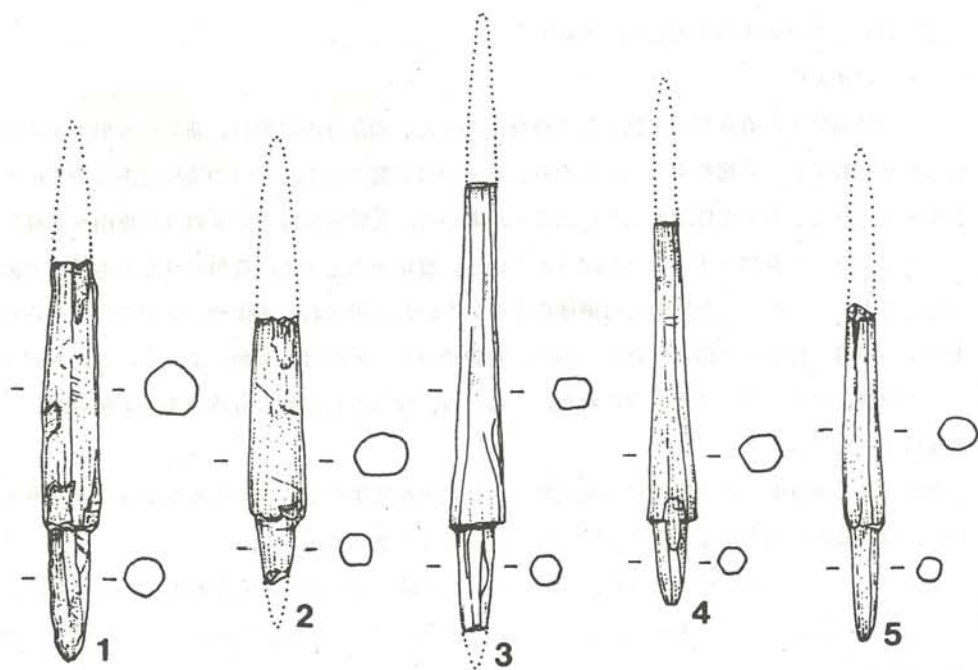


Fig. 17 骨器実測図 (実大)

仲筋貝塚からは以上のような、茎をもつ鏃の形をした尖頭器が出土した。骨を材料として鉄器で削って形をつくっていく特徴あるこの種の骨器は、石垣島では他にヤマバレー遺跡や、カンドウ原遺跡、山原遺跡などで出土がいられている。素材としたのは、おそらくこの仲筋貝塚の動物種の中ではウシの他には考えられない。ウシの四肢骨はシカのそれと形態的に似ており、しかも大型で緻密質も厚いので、こうした骨器製作を可能にしたことと思う。擦り切り痕のある骨や、未成品が出土していないので詳しいことはわからないが、鉄器を利用して、比較的容易に製作したのではなかろうか。製品は全体に細長くきゃしゃなつくりである。これらは狩猟に使用したとするより、やはりヤスとして漁具などに利用されていたと考える方がよいと思われる。

(牛沢 百合子)

第Ⅳ章 まとめ

沖縄県石垣市字仲筋に所在する仲筋貝塚は川平湾を望む標高40m前後の砂丘上に形成された主鹹貝塚である。約10×5mの楕円形の貝層が計5ヶ所に点在しており所謂、列点貝塚である。

今回の調査では約55㎡を発掘し、北側部分で一地点の貝層をほぼ全掘した。その貝層は、ほとんど攪乱を受けていない。また貝層は、分層することの不可能な単一の層であり、しかも堆積層がさして厚くない点から見て、貝塚の形成期間は比較的短かかったと考えられる。従って、貝層中の遺物の時間差もほとんどないものと思われる。出土遺物の点から見ると、今回主として発掘した貝層と遺跡全体の出土遺物、特に中国陶磁の統計データの比較からすると、この一地点の貝層の結果を以って仲筋貝塚全体に敷衍して考えても、さしたる相違はない様である。

出土遺物としては土器、陶磁器、鉄製品、石製品等があった。土器は煮沸用の用途に使用された鍋形土器を主とし壺形、鉢形などの器種も少量見られた。また土器は胎土の点から三分類出来、Ⅰ類とした石粒を多く含むタイプの土器は陶磁器を伴出しない古い時期の遺跡から出土してくる土器と、胎土・成形技法などの点に於て、類似しており、文化的・時間的連続性を示している。Ⅱ類とした貝殻片、サンゴ片を多く含む土器は、前者よりも技術的に発達しており、出土量も多い。Ⅲ類とした赤褐色の鉄粒子を含む土器は壺形土器に限られ、宮古島系統の土器と考えられる。八重山と宮古島地域との交易関係を示す具体的な遺物として、極めて重要な土器片である。

陶磁器は全て中国産と考えられるやきもののみで、日本本土や沖縄在地のやきものは全く含まれていない。陶磁器の器種は、日常生活に使用された碗・皿類と、運搬用のパッケージ(後に貯蔵壺として転用か)であった南蛮壺類が大部分である。碗・皿類は青磁を主として、若干

の白磁類をも含んでいる。青磁の碗類には雷文碗タイプと細線刻蓮弁文碗タイプを中心としており、名蔵湾シタダル遺跡の一括遺物のパーセンテージと類した結果を示す。嘉靖タイプの染付碗がごく少量『表採』で得られるのみで、発掘地区からは一片の出土もなかったことは、青磁から染付への画期を把握できたと言う点で、大きな成果であった。青磁類の考察から、該貝塚の年代は15世紀中葉から15世紀後半代にかけての間の短期間に形成された貝塚と推定する。

陶磁器の中には、我国の遺跡では極めて珍しい青釉（孔雀釉）や天目碗片そして竜文貼付の壺片などの発見もあった。

鉄製品は鉄鍋片、刀子、鉄釘などが出土しており、また鉄滓の出土やフィゴの羽口が表採されていることから、こうした製品が15世紀代に該遺跡内で生産されていたと推定される。鉄製品の普及と併行しながらも、石斧や敲石などの石製品が同時期に使用されていることは注目されねばなるまい。

この他、表採品ではあるが、開元通宝などの古銭類や勾玉類などの発見もあった。

動物遺存体としては貝類、魚骨、獣骨などがあった。貝類では海産貝が圧倒的に多く、それも内湾性の小形の貝が多い。また二枚貝が巻貝よりもはるかに多い。仲筋貝塚出土の貝の種類と川平湾一帯に棲息する貝の種類とはよく一致しており、当時の人々の貝類採取領域を推定することも出来た。獣骨の中には牛骨なども多く見られ、今後南島での食物史を考えてゆく際に特に留意されてよいものと考えられよう。

以上の様なことが、仲筋貝塚の発掘調査・整理に依って明らかとなった。

（関口 広次）

THE EXCAVATION OF NAKASUJI SHELL-MOUND

The Nakasuji shell-mound is located in Ishigaki Island, the southern island of Japan about 400 km south-west of the Ryukyu Islands. The shell-mound was made on a sand-dune of ca.40 meters high, and looked out upon Kapira Bay. The shell-mound is studded with five oval-shaped shell layers which contain mainly sea shells.

The investigation was made on a part of the shell mound, about 55 meter area of a single shell layer at the north side of the mound, and the complete layer was excavated. The layer had not been destroyed and was found as one layer which could not be separated. The heap of shells is comparatively thin, which suggests that shell layer was of a single cultural stratum and was made in a short period. That is, it is presumed that the findings from the layer were thrown away on the kitchen midden more or less at the same time. It is evident from the investigation of the findings and specifically those of Chinese ceramics, that the results of the excavated shell layer can be extended to the entire shell-mound.

As for the findings, there are simple earthenwares, other ceramics, iron wares and stone tools. The earthenwares are mainly cooking vessels, and some jars or bowl shaped vessels. They are divided into three groups according to their clay: (I) vessels made with sandy clay, showing close relationship to earthenwares excavated at sites where no other ceramics were found. Their sandy clay and shaping techniques are similar to each other, which suggests the continuation of the culture. (II) vessels made with clay containing shell chips and coral chips. (III) vessels made with high iron-content clay. They are all jars in the Miyako islands style and are definite proof of trade between the Miyako islands, so that they are extremely important.

The other ceramics are believed to be of Chinese origin and no Japanese or local Okinawan wares are included. They are dishes and bowls for daily use, and jars used as carrying containers and probably as storage jars too. No blue-and-white porcelain was found in the excavated area. The excavated dishes and bowls are mainly celadon wares and some white porcelain fragments. Two designs are observed on celadon ware bowls, a key-fret design and a carved lotus petal design. A study of the celadon pieces gave the date of the Nakasuji shell-mound as from the mid to the late fifteenth century, and limited to a short period.

Blue-and-white porcelains of the China-ching period are found on the surface in small numbers only and no other blue-and-white pieces were found at all. This is a very important result of the excavation.

Among the ceramics there are pieces only rarely found in Japan, such as turquoise blue glazed fragments, Temmoku bowls and jars with applied dragon designs.

As for iron wares, fragments of iron pan, knife, and nails were excavated. They are presumed to have been made on the site in the fifteenth century, because iron scraps are parts of bellows were found in the top soil. It may be noticed that stone implements such as axes and beating tools were still in use while iron vessels were gradually being popularized.

There are some miscellaneous finds such as Chinese coins (Kai-yuan-tong-bao) and jades (e.g. magatama beads).

Natural objects were also excavated such as shells, fish bones and animal bones. The shells are mainly sea shells, especially small shells of a kind found in the bay. The composition of shells in the Nakasuji shell-mound and those from the Kapira Bay is very much alike, so that it is deduced that was the fishing area of shells by the people in the fifteenth century. Among the animal bones, some cow bones were recognized. It is interesting for our knowledge of food materials in these southern islands.

Note

1. The investigation was made by the investigation committee of the Nakasuji Shell-mound in Ishigaki Island. The excavation was carried on for twelve days from 26th December 1979 to 6th January 1980.
2. The leader of the investigation committee is Eisen Ohama. All the members of the committee shared the necessary expenses of the investigation.
3. The research on the findings was pursued immediately after the excavation in Ishigaki Island and also in Tokyo until the end of February 1981.
4. The contributors and editors of the report are:
Hirotsugu Sekiguchi Fujio Nakazawa
Akio Tanigawa Naoji Ari
Eisen Ohama
5. The research into animal bones was undertaken by Yuriko Ushizawa, a member of archaeological study staff in Waseda University.

(Translated by Hiroko Nishida)